

## ワイルドとペーターの『享楽主義者マリウス』

木村 克彦

ワイルドとペーターの『享楽主義者マリウス』を比較するにあたり、その作品の大まかな性質から見ても、また、同じ長編小説であるという点から見ても、『ドリアン・グレイの肖像』と比較することが、有意義な結果を齎してくれると思われるので、本論では主に『ドリアン・グレイの肖像』をその比較の主なる対象としたい。

『享楽主義者マリウス』、第2章において、まず、マリウスの少年時代は、「観照の生活」のそれとして、描かれている。

Thus the boyhood of Marius passed; on the whole, more given to contemplation than to action.<sup>(1)</sup>

マリウスの少年時代は、このようにして過ぎて行った。それはおおよそ行動よりも観照の生活であった。

マリウスは、その後も、この「観照の生活」を基盤として人生を送る。行為よりも観照に重きが置かれたのだ。第九章でマリウスは自らに自己の態度を確認する。

“Not what I do, but what I am, under the power of this vision” — he would say to himself — “is what were indeed pleasing to the gods!”<sup>(2)</sup>

「この直観の力のもとに、私がすることではなく、私があることが、神のよみしたもうところである」——彼（マリウス）はしばしばこのように、自らに言うのであった。

ペーターから深甚な影響を受けたワイルドは、「観照の生活」なるものについて、取り敢えずは賛同を示している。「芸術家としての批評家」において言う。

...in the opinion of society, Contemplation is the gravest sin of which any citizen can be guilty, in the opinion of the highest culture it is the proper occupation of man.<sup>(3)</sup>

……社会の見るところによれば、「観照」というものは市民の犯し得る最大の罪であるが、最高の文化の見地からすれば、それこそが人間本来の仕事なのだ……

ここでワイルドは「観照」を「人間本来の仕事」としているが、ワイルドがそれを「自己本来の仕事」に限定したかどうかは疑問である。また更にワイルドは、「芸術家としての批評家」において、「観照の生活」を、より具体的に述べている。

The gods live thus...watching with the calm eyes of the spectator the tragi-comedy of the world that they have made. We, too, might live like them, and set ourselves to witness with appropriate emotions the varied scenes that man and nature afford. We might make ourselves spiritual by detaching ourselves from action, and become perfect by the rejection of energy.<sup>(4)</sup>

神々はこのようにして生きているのだ……自分たちの作った世界の悲喜劇を傍観者の澄んだ目で見つめながら生きているのである。私たちも、また、神々のように生きて、人間と自然が提供する様々な場면을、それに相応しい感情をもって目撃しても良いのだ。自分を行為から引き離して、自分を精神的にし、エネルギーを拒否して完璧となっても良いのだ。

ここでもワイルドは、「行為」なるものから、自分を引き離すとしてしまっている。もしそうであったなら、あれ程の有為転変に満ちたワイルドの生涯は、この言に合致しないのではないか。即ち、これらには、仮面のワイルドがいるとも言えるかもしれない。前掲のペーターの「私がすること」ではなく、「私があること」という言い方に、かなり良く似た言い方をワイルドもしている。ワイルドは「芸術家としての批評家」において言う。

...the contemplative life, the life that has for its aim not *doing* but *being*, and not *being* merely, but *becoming* — that is what the critical spirit can give us.<sup>(5)</sup>

……観照の生活、なすことではなくあること、しかも単にあることではなく、さらに成ることをその目的とする生活——これこそ批評精神が私たちに与え得るものなのだ。

ここでワイルドは、自己が「あること」のみならず、「成ること」という一節を、付け加えている。では、ワイルドにおける「成ること」とは？

ペーターの場合は、「観照」の生活態度は、彼の美意識とも結び付いていたようである。

...he too feels himself to be something of a priest, and that devotion of his days to the contemplation of what is beautiful, a sort of perpetual religious service.<sup>(6)</sup>

……マリウスは、何となく僧侶のような気分になり、美しいものの観照に捧げられた日々は、四六時中、絶えることのない宗教的儀式のように感じられた。

ここでは、マリウスの「観照」は、「美しいもの」を対象としており、宗教的な敬虔さをも感じさせるものとなっている。またマリウスは、その生涯を閉じるにあたり、この世を「観照」してきたこと、「見て」きたことを、次のように回想する。

Revelation, vision, the discovery of a vision, the *seeing* of a perfect humanity, in a perfect world——through all his alternations of mind, by some dominant instinct, determined by the original necessities of his own nature and character, he had always set that above the *having*, or even the *doing*, of anything....And how goodly had the vision been! —— one long unfolding of beauty and energy in things...<sup>(7)</sup>

啓示、直観、直観の発見、完全な世界における完全な人間性を見ること——彼（マリウス）の心の様々な変化を通して、常にある強い本能と生まれながらの性格に内在する必然的な力に規定されて、いかなるものを持つことよりも、あるいは、いかなることをすることよりも、それを一層大切なことと考えてきた。……そしてその直観のいかに美しかったことであろう！それはよろずのものの中の美と力の長い一連の展開であった  
.....

マリウスにとっては、観照の対象も美であったし、観照そのものも美であった。マリウスは、もし彼の生活が観照の生活のみであったとしても、それは充分、充足したものであったであろう。『享樂主義者マリウス』は、言わばマリウスの精神遍歴の記録であり、マリウスの交友関係、対人関係も、マリウスをして何らかの極端な行為へと走らせることはない。ではワイルドの場合は……前述のようにワイルドは、「観照の生活」を一応讚美しながらも、‘becoming’ という一語を付け加えずにはおれなかった。ワイルドの場合、「成ること」とは行為を意味したかもしれない。あたかもヘンリー卿の強烈な感化を受けたドリアンのように、ワイルドは、退廢的な行為に耽ることを辞さなかった。この点、生涯を「象牙の塔に立て籠もり」と評されたペーターとは、はっきりとした対照を成していると言える。また、この対照は、両者の小説の主人公の対照へと通じる。ドリアンは、魂を肖像画に背負わせ退廢し、殺人を冒す——この方が小説らしいと言えは言えるが——これに比してマリウスのそれは、至極平穩なものである。マリウス自身、自己の死期を悟ったときに、自分の一生を次のように振り返るのである。

Looking back sometimes now, from about the midway of life...he would note, almost with surprise, the unbroken placidity of the contemplation in which it had been passed. His own temper, his early theoretic scheme of things, would have pushed him on to movement and adventure. Actually, as circumstances had determined, all its movement

had been inward; movement of observation only, or even of pure meditation;...<sup>(8)</sup>

今、過ぎこしかたを旅半ばで振り返ってみると、観照に明け暮れた日々の生活の破れることのない平穏さにマリウスは驚いた。彼自身の気質と、彼の早くからの人生観は、彼を駆って、運動と冒険の生活に向かわせても不思議ではなかった。しかし実際においては、種々の事情から、その運動は全て内面的なもので、単なる観察あるいは純粋な瞑想に限られていた……

即ち、ペーターとワイルドの小説の主人公には、その作者たち自身の実人生の過ごし方と、密接な連続性があると言えよう——即ちペーターの「観照の生活」と、ワイルドの「行動の生活」とである。

次に両者の刹那主義について考察してみたい。ペーターは『ルネサンス』において、人生を短いものと観じ、それ故、その瞬間瞬間を重視し自己を集中させよというような刹那主義を、唱導したが、この思想は『享楽主義者マリウス』にも受け継がれている。

“The world, within me and without, flows away like a river,” he had said; “therefore let me make the most of what is here and now.”<sup>(9)</sup>

「心の内なる世界も外なる世界も河の水のように流される」と、マリウスは語った。  
「それ故に現在、ここにあるものを大切にしよう」

またマリウスの刹那主義は、例えば瞬間の快樂に身を委ねてしまうような類いのものでは、決してなかった。

—— insight, insight through culture, into all that the present moment holds in trust for us, as we stand so briefly in its presence.<sup>(10)</sup>

—— 洞察というのは、教養を通して身に付ける洞察であって、刻々に過ぎ行く現在の瞬間が、私たちに提供するあらゆるものに対する洞察である。

マリウスの刹那刹那は、上記の如く「教養」なるものを、その根底とするものであり、一時的、恣意的な快樂主義とは異なるものであった。ではドリアンの場合はどうか。ドリアンは、ヘンリー卿の「新しい快樂主義」の洗礼を受ける。ヘンリー卿がドリアンに向かって言う。

Don't squander the gold of your days, listening to the tedious, trying to improve the hopeless failure, or giving away your life to the ignorant, the common, and the vulgar.

These are the sickly aims, the false ideals, of our age. Live ! Live the wonderful life that is in you ! Let nothing be lost upon you. Be always searching for new sensations. Be afraid of nothing....A new Hedonism——that is what our century wants. You might be its visible symbol. With your personality there is nothing you could not do.<sup>(11)</sup>

かけがえのない人生を、退屈な連中の話に聴き入ったり、直る見込のない欠陥を何とか良くしようとしたり、無知俗悪な人間どもに自分の命を投げ出したりして無駄に費やしては駄目です。こういう人生の浪費が現代では病的にも目的とされ、偽りもはなはだしいが理想となっているのだ。生きるのだ！あなたの中にある素晴らしい生命を発揮するのだ！何ももの取り逃がさず、絶えず新たな感覚を捜し求めるのだ。何事も恐れることはない……新しい快樂主義——それこそ現代が必要とするものであり、あなたはその目に見える象徴となることができる人なのだ。あなたのような人間にできないことは何もない。

このような言葉に感化されたドリアンは、新しい快樂主義者となり、過ぎ行く瞬間瞬間を、浪費せず貴ぶ点ではマリウスと変わりがないものの、反面、同時にこの世のありとあらゆる快樂を味わい尽くそうとする——悪をも含めて。バジルは退廃生活を送るドリアンを、次のようになじる。

...you were simple, natural, and affectionate then. You were the most unspoiled creature in the whole world. Now, I don't know what has come over you. You talk as if you had no heart, no pity in you. It's all Harry's influence. I see that.<sup>(12)</sup>

……あの頃の君は単純で、自然で、愛情の細やかな人間だった。世界広しといえども、君ほど無垢な人間は他にあるまいとさえ思われた。ところが、今はどうだ、一体、君はどうしたというのだ。君の話しぶりを聞いていると、まるで君には心が、憐れみが一かけらもないようだ。何もかもハリーの感化だな。それに違いない。

即ちドリアンは、ヘンリー卿から「できないことは何もない」と感化され、「心」や「憐れみ」といったもの捨て、「悪」の道を歩んでしまったのである。これに対しマリウスは、やはりペーターその人の性向をも反映して、極端な道へと進むことはなかった。

...it had always been his policy, through all his pursuit of "experience," to take flight in time from any too disturbing passion, from any sort of affection likely to quicken his pulses beyond the point at which the quiet work of life was practicable.<sup>(13)</sup>

……彼（マリウス）は常に人生の「経験」を追及してゆくとき、自分の心をあまりにも

強くかき乱しそうな情熱や、落ち着いて静かな生涯の仕事ができなくなる程、脈拍を高めるような感情から、手遅れにならないうちに引き返すことを、処世の信条にしてきたのである。

ドリアン「できないことは何もない」のに対し、マリウスは、極端さに走るものがない、言わばバランス感覚のようなものを有していたのである。

また、ペーターの刹那主義は、『ルネサンス』におけると同様、人生を短いものと観ずることにより、尚一層強められているように思われる。このことは『享楽主義者マリウス』においても敷衍されている。

...a life brief at best could not certainly be shown to conduct one anywhere beyond itself...<sup>(14)</sup>

……いくら生き延びても結局短い人生が、私たちが人生以上のものに導いてはくれない  
……

人生の短さを嘆くのは、ワイルドも同様である。が、ワイルドの場合、それは「若さ」の絶対的な讚美へと繋がる。やはり、ヘンリー卿がドリアンに向かって説く。

You have only a few years in which to live really, perfectly, and fully. When your youth goes, your beauty will go with it,...For there is such a little time that your youth will last ...Youth! Youth! There is absolutely nothing in the world but youth!<sup>(15)</sup>

あなたが真の人生、完全にして充実した人生を送り得るのも、もうあと数年のことですよ。若さが消え去れば、美しさも共に去ってしまう。……あなたが若さを持ち続けられる期間はほんの僅かなのだから。……若さ！若さ！若さを除いたら、この世に何が残るといふのだ！

ヘンリー卿の感化によって、ドリアンにとっては、若さ＝美となる。更に美を失うことについて、ドリアンが次のように言う。

...when one loses one's good looks, whatever they may be, one loses everything.<sup>(16)</sup>

……美貌を失うことは、たとえそれがどんなものであろうと、全てを失うことなのだ。

即ち、若さを失うことは全てを失うこと、つまりは、時が経つことは全ての否定であるということになる。ドリアンはヘンリー卿の教義をそのまま受け容れ、何の葛藤も示さ

ない。これに比して、マリウスの場合はどうであったか。マリウスは、ローマの王子たちの指導教授である老人フロントーに直面した折、次のように観ずる。

The wise old man, ...would seem to have replaced carefully and consciously each natural trait of youth, as it departed from him, by an equivalent grace of culture;...<sup>(17)</sup>

その聡明な老人（フロントー）は、……若さに伴う美が年と共に失われてゆくとき、それに相当する教養の美をもって、注意深く意識的に置き換えたかのようであった……

「老醜」を嫌悪するヘンリー卿やドリアンとは、対照的である。即ちペーターにとって、美とは、若さのそれ、外面的なそれのみならず、「教養」が齎してくれる美をも含んでいたのだ。実際ペーターが、短い人生の中で目指したものは、短さ故の若さの美の讚美ではなく、もっと内面的なものを含んでいた。マリウスは、人生は短いものと認識しながら、次のように考える。

...he hopes, ...to make the most, in no mean or vulgar sense, of the few years of life; few, indeed, for the attainment of anything like general perfection!<sup>(18)</sup>

……マリウスは……この世に与えられた僅かな歳月を、いやしからぬ方法で、できるだけ活用したいと望む。まことに人格全体の完成を成就するには、あまりにも短い人生である！

即ちマリウスは、短い人生で、若さを謳歌し快樂を味わい尽くすよりも、根本的に、「人格全体」の完成を目指していたのである。この点、ニュー・ヒドニズムの影響下に退廃していったドリアンとは、鋭い対照を成している。

次にペーター、ワイルドの道徳的側面を考察してみたい。そこでまず、マリウス、ドリানের「良心」なるものに対する捉え方であるが、マリウスは良心を道徳と分かち難く結び付けている。

...each age in turn, perhaps, having its own peculiar point of blindness, with its consequent peculiar sin——the touch-stone of an unfailing conscience in the select few.<sup>(19)</sup>

……あらゆる時代はおそらく、それに応じた特有の罪と一緒に、それぞれ特有の盲点を有している——選ばれた少数者の誤りなき良心の試金石といったものを有している。

これに対しドリアンは、自己の「良心」を捨て去り、肖像画に背負わせてしまう。

It had been like conscience to him. Yes, it had been conscience.<sup>(20)</sup>

これ（肖像画）は、彼（ドリアン）にとって良心と同じようなものだったのだ。そうだ、良心だったのだ。

この「良心のあるなし」は、両者の道德観を、決定的に異なれるものとしているように思われる。

まずマリウスであるが、彼は『享樂主義者マリウス』冒頭から、謹嚴実直なる性向を有する若者として描かれており、第二章冒頭においては、以下のようなくだりがある。

To an instinctive seriousness, the material abode in which the childhood of Marius was passed had largely added.<sup>(21)</sup>

生まれつき真面目なマリウスの性質は、彼が幼年時代を過ごした住まいの影響によって、一層真面目になった。

この点、生まれながらにして、ニュー・ヒドニストの素養を備えていたドリアンとは、対照的である。ドリアンは、ヘンリー卿に感化された後にも、次のように書かれているのである。

...Lord Henry's influence, and the still more poisonous influences that came from his own temperament.<sup>(22)</sup>

……ヘンリー卿の影響力と、それにも増して強い彼自身の性向からくる影響力……

しかし、謹嚴実直なマリウスにも、その享樂主義は、時として、道德と相反する快樂主義と見られないこともなかった。

...it (aesthetic philosophy) would be found, from time to time, breaking beyond the limits of the actual moral order; perhaps not without some pleasurable excitement in so bold a venture...Yet there were some among his acquaintance who jumped to the conclusion that, with the "Epicurean stye," he was making pleasure——pleasure, as they so poorly conceived it——the sole motive of life;...<sup>(23)</sup>

……美的哲学は、現在行われている道德律の範囲をしばしば越え、その大胆な冒険がかえって楽しい興奮を呼び起こすことも有り得るのである。……彼（マリウス）の交友の中には、マリウスは「享樂主義者の豚小屋」に入って快樂——彼等が臆面もなく考える卑俗な快樂——を人生の唯一の目的にしていると、誤って性急な結論を下す者もいた



のである……

しかしここで、「快樂」なるものの意味合いが、ペーターとワイルドでは異なってくる。ドリアンにとっての「快樂」とは「悪」や「罪」といったものに繋がっていくものであった。ヘンリー卿が、ドリアンに向かって言う。

The body sins once, and has done with its sin, for action is a mode of purification. Nothing remains then but the recollection of a pleasure, or the luxury of a regret.<sup>(24)</sup>

肉体はひとたび罪を犯してしまえば、その罪と手を切ることができる。行動とは一種の浄化作用に他ならぬからだ。罪を犯したあとに残るものと言え、快樂の思い出か、悔恨という豪華な感情だけなのだ。

これとは対照的に、マリウスの念頭に浮かぶ「快樂」とは、次のようなものであった。

...comprehensive enough to cover pleasures so different in quality, in their causes and effects, as the pleasures of wine and love, of art and science, of religious enthusiasm and political enterprise, and of that taste or curiosity which satisfied itself with long days of serious study.<sup>(25)</sup>

……快樂といっても、その質は原因と影響の両面に渡って様々に異なっていて、酒と恋愛、芸術と科学、宗教的熱情と政治的事業、日ねもす真剣な研究にいそしむ趣味、あるいは好奇心の快樂などがある。

ここでの「快樂」には、ドリアンやサロメのような——特にサロメのような——類いの快樂は希薄であり、しかも「宗教的熱情」や「研究にいそしむ」快樂にいたっては、ドリアンのそれとは、大いに異なるものであろう。ドリアンは、退廃の極みにあった時点では、以下のような生活を送っていた。

Ugliness was the one reality. The coarse brawl, the loathsome den, the crude violence of disordered life, the very vileness of thief and outcast, were more vivid, in their intense actuality of impression, than all the gracious shapes of Art, the dreamy shadows of Song.<sup>(26)</sup>

醜悪さのみが、唯一の現実なのだ。下品ないさかい、唾棄すべき魔窟、乱れた生活のがさつな荒々しさ、盗っ人や浮浪者の醜さ——こういったものは、それが人間の印象に与える強烈な現実感によって、「芸術」の優美な姿形や「詩」の夢幻的な影よりも、はる

かに生き活きと感じられるのだ。

「生活」なるものの送り方は、ドリアンとマリウスでは対照的である。マリウスのそれは、ドリアンの「乱れた生活のがさつな荒々しさ」などというものとは、正反対の性質のものであった。

Not pleasure, but fulness of life, and “insight” as conducting to that fulness——energy, variety, and choice of experience, including noble pain and sorrow even, loves such as those in the exquisite old story of Apuleius, sincere and strenuous forms of the moral life, such as Seneca and Epictetus——whatever form of human life, in short, might be heroic, impassioned, ideal: from these the “new Cyrenaicism” of Marius took its criterion of values.<sup>(27)</sup>

快楽ではなく生の充実、そしてその充実に導くような「識見」——高貴な苦痛と悲哀さえ含む経験の精力と、多様と、精選、アプレイウスの精妙な古い物語にあるような愛、セネカやエピクテトスのような誠実で堅忍不拔な道德生活——要するに雄々しく熱情的で、理想的な人間生活の諸相——これらのものにマリウスの「新キュレネ主義」は、その価値の基準を置いた。

ここでは、快楽よりも、道德的な生活を送ることによる「生の充実」が唱えられている。またマリウスが、短い人生の中にあつて“general perfection”<sup>(28)</sup>「人格全体の完成」を目指したことは、先にも述べたが、マリウスのエピキュリアニズムは、快楽の追求よりもはるかに道德的なものであり、その目指すところは、やはり「生の充実」、「人生の完成」であった。

And Cyrenaicism or Epicureanism too, new or old, may be noticed, in proportion to the completeness of its development, to approach, as to the nobler form of Cynicism, so also to the more nobly developed phases of the old, or traditional morality. In the gravity of its conception of life, in its pursuit after nothing less than a perfection,...it may be conceived, as regards its main drift, to be not so much opposed to the old morality, as an exaggeration of one special motive in it.<sup>(29)</sup>

そして古今のキュレネ哲学あるいはエピキュリアニズムは、それが完全に発達すればする程、より高貴なシニシズムに近づくとともに、より高貴なものに発展した古い伝統的な道德に近づく。人生を考える態度の厳肅さにおいても、生活全体の完成を迫及する点においても……キュレネ哲学はその本質的な傾向において、古い道德に反対するもので

はなく、むしろその中に含まれた一つの特異な動機を誇張したものであると考えられる。

これに対しドリアンが追求したものは何であったか——ドリアンの有名な言葉。

I have never searched for happiness. Who wants happiness? I have searched for pleasure.<sup>(30)</sup>

僕は幸福など求めたことはありません。誰が幸福など欲しいものでしょうか。僕が求めてきたのは快楽です。

以上のような、マリウスとドリアンの、道徳のあるなしに基づいた人生観の違いは、いみじくも、ペーター自身が、『ドリアン・グレイの肖像』を評した以下のような言葉に、明瞭に示されている。

A true Epicureanism aims at a complete though harmonious development of man's entire organism. To lose the moral sense therefore, for instance, the sense of sin and righteousness, as Mr. Wilde's heroes are bent on doing so speedily, as completely as they can, is to lose, or lower, organisation, to become less complex, to pass from a higher to a lower degree of development.<sup>(31)</sup>

真の享楽主義は、人間の体全体の、完全でかつ調和した発達を目的とする。それ故、ワイルド氏の登場人物が可能な限り速く完全に喪失してしまおうと決意しているが如く、倫理感、例えば罪と正義の感覚を喪失することは、精神と肉体の秩序を喪失し、あるいは低め、より安逸になり、発達の高位から低位へと墮ちることなのである。

以上から、マリウスが「エピキュリアン」であったのに対し、ドリアンは「ニュー・ヒドニスト」であったことが、再確認できよう。ワイルドは、ドリアンに「エピキュリアン」という言葉を冠することを、意識して避け、またワイルド流の「快楽主義者」という意味合いを込めて、「ニュー」という形容詞を付け加えたものと思われる。

次に、両者の美意識を比較検討してみたい。まずワイルドであるが、ドリアンにとって「美」とは、どちらかと言えば外面的なそれであった。ヘンリー卿がドリアンに向かって言う。

People say sometimes that Beauty is only superficial. That may be so.... To me Beauty is the wonder of wonders. It is only shallow people who do not judge by appearances. The true mystery of the world is the visible, not the invisible...<sup>(32)</sup>

美は表面的なものにすぎぬという人がある。あるいはそうかもしれない。……僕にとっては美は驚異中の驚異だ。ものごとを外観によって判断できぬような人間こそ浅薄なのだ。この世の真の神秘は可視的なもののうちに存する。見えざるもののうちにあるのではない……

これに対し、マリウスにとっての「美」は、内面的なるものである。

With this was connected the feeling, increasing with his advance to manhood, of a poetic beauty in mere clearness of thought, the actually aesthetic charm of a cold austerity of mind;...<sup>(33)</sup>

それと共に、マリウスが成長するに従って、思想の単なる明晰さの中にも詩的な美があり、冷静な心の厳粛さにも真に美的な魅力があるという感情が生まれてきた。

マリウスの「美」は、外面的なそれではなく、「思想」や、また、内面的な心の「美」であった。更にマリウスは、ワイルドが『ドリアン・グレイの肖像』において、芸術の埒外へと追いやった「道徳」にも「美」があるとする。

The old Greek morality,...with all its imperfections, was certainly a comely thing...The merely aesthetic sense might have had a legitimate satisfaction in the spectacle of that fair order of choice manners,...<sup>(34)</sup>

……古代ギリシャの道徳もいろいろ欠点があったけれども、確かに美しいものだった。……精選された作法の美しい秩序を眺めるだけでも、私たちの美感は、当然のことながら満足を覚えた……

また更にマリウスは、「純潔」なるものを、次のように、美しいとする。

Chastity, — the chastity of men and women, amid all the conditions,...is the most beautiful things in the world and the truest conservation of that creative energy by which men and women were first brought into it.<sup>(35)</sup>

純潔——あらゆる条件のもとにおける男女の純潔は……この世における最も美しいものであり、男女が最初にこの世に生まれてきた創造的エネルギーを、最も真実に保存するものである。

マリウスは、「純潔」を「最も美しい」としている。この点、卑俗な快樂にも身を委ね

てしまったドリアン、更には作者ワイルドとも、著しく対照的である。またマリウスは、チェチリア家の家族生活を見るにつけ、それも美しいと観ずる。

And this severe yet genial assertion of the ideal of woman, of the family, of industry, of man's work in life, so close to the truth of nature, was also, ...realised as an influence tending to beauty, to the adornment of life and the world.<sup>(36)</sup>

そして婦人と、家族と、勤勉と、人生の営みに関する理想の、この厳しい、しかし望みに満ちた主張は、自然の真理に近いばかりか……美に向かう影響、人生と世界を美化する影響として実現した。

この点も、家庭がありながら、卑俗な快樂へと走ったワイルドと対照的である。

以上のような両者の「美」に対する差異は、どこから生じたのか。それはやはり、「美」における「善悪」の概念の相違からであるように思われる。『享楽主義者マリウス』の冒頭近く、マリウスの性向は、まず次のように規定されている。

...a certain vague fear of evil, constitutional in him, ...<sup>(37)</sup>

……マリウスは生まれつき、悪に対する漠然とした怖れを抱いていて……

そしてこの性向は、後々、マリウスの中に「善」と「悪」の葛藤を齎すことになる。

He at least, ...was aware of a crisis in life, in this brief, obscure existence, a fierce opposition of real good and real evil around him, ...<sup>(38)</sup>

……マリウスは少なくとも、この短い臙げな存在の中にあっても、人生には危機があつて、真の善と真の悪との激しい対立が、彼を取り巻いていることを認めた……

この葛藤の中にあつて、マリウスが常に「善」をもって良しとしたのは、先述のような道德観や良心の働きであつたらう、が、そればかりでなく、その根底には、「宗教」的なものも横たわっていた。

The thirst for every kind of experience, ...had ever been at strife in him with a hieratic refinement, in which the boy-priest survived, prompting always the selection of what was perfect of its kind, ...<sup>(39)</sup>

……あらゆるものを経験したいという気持ちは、マリウスにあつては、常に聖職者的な洗練された趣味と鋭く対立していた。これには少年時代の祭司の思い出が残っていて、

常にその類いの完全なものを選択するよう促した……

このようにマリウスは、あらゆるもの——「悪」をも含めて——の誘惑に、「宗教的な善」をもってして打ち勝っていたのである。そしてこの「宗教的感覚」は、マリウスにとっての「美」への愛とも結び付いて見えた。

The saint, and the Cyrenaic lover of beauty, it may be thought, would at least understand each other better than either would understand the mere man of the world.<sup>(40)</sup>

美を愛するキュレネ主義者と聖者は、単なる世俗の人が理解し合うよりも、少なくともお互いを理解し合えるように思われた。

マリウスにおける美は、あくまで、「宗教的な善」に裏打ちされたものでなければならなかった。この点、ドリアンにおける「美」とは、著しく対照的である。

There were moments when he looked on evil simply as a mode through which he could realise his conception of the beautiful.<sup>(41)</sup>

悪というものも所詮は、自分が抱いている美の概念を実現する一手段に過ぎぬと思う瞬間が、ドリアンには一度ならずあったのだ。

かくの如くドリアンにとって「美」は、「悪」と分かち難く結び付いてしまった。その結果は……それは、はからずも、『享楽主義者マリウス』の次のような一節に暗示されている。

Surely evil was a real thing, and the wise man wanting in the sense of it, where, not to have been, by instinctive election, on the right side, was to have failed in life.<sup>(42)</sup>

確かに悪は実在する。そして悪に気が付かないで、本能的な選択によって正義の側に立つことができないで来た賢人は、人生に失敗することとなったであろう。

以上、『享楽主義者マリウス』と、主に『ドリアン・グレイの肖像』の比較を試みたが、両作の相違は、やはりペーター、ワイルド両者の相違と重なり合うと言えよう。自ら進んで、そこに悲劇が待っているかもしれないと分かってはいても、実人生に飛び込んでいっ

たワイルドに対し、象牙の塔から人生を觀照していたペーター。刹那的な快樂にも耽ったワイルドに対し、刹那を芸術的生活によって充実させようとしたペーター。芸術を道德から超越させ悪をも犯したワイルドに対し、宗教的善をその根底とし、あくまで道德的な作品を描いたペーター。この両者の相違を、いみじくも言い当てた言葉が『獄中記』にある。ワイルドは言う。

In *Marius the Epicurean* Pater seeks to reconcile the artistic life with the life of religion in the deep, sweet and austere sense of the word. But Marius is little more than a spectator: an ideal spectator indeed, and one to whom it is given “to contemplate the spectacle of life with appropriate emotions,” which Wordsworth defines as the poet’s true aim...<sup>(43)</sup>

『享楽主義者マリウス』の中で、ペーターは、その言葉の深遠な、甘美な、峻厳な意味において、芸術的生活を宗教的生活と調和させようとしている。だが、マリウスは傍觀者以上には出ていない。もとより理想的な傍觀者であり、ワーズワースが詩人の真に目指すべき所と定義している「適切な感情をもって人生のスペクタクルを凝視する」資質を与えられた人間ではある。

これは、『享楽主義者マリウス』の特質を見事に言い当てた言である。と、同時に人生を「傍觀」するだけでは飽き足らず、実人生にそこに悲劇が待っているかもしれぬと分かっているながらも飛び込んで行った、ワイルドその人の特質も表出されていると言えよう。

#### Notes:

- (1) Walter Pater, *Marius the Epicurean* Vol.1 (Macmillan, 1921), p.24.
- (2) *ibid.*, p.154.
- (3) Oscar Wilde, “The Critic as Artist” (Collins, 1983), p.1039.
- (4) *ibid.*, pp.1041-2.
- (5) *ibid.*, p.1041.
- (6) Walter Pater, *Marius the Epicurean* Vol.2 (Macmillan, 1921), p.17.
- (7) *ibid.*, p.218.
- (8) *ibid.*, pp.208-9.
- (9) *Marius the Epicurean* Vol.1, p.201.
- (10) *ibid.*, p.142.
- (11) Oscar Wilde, *The Picture of Dorian Gray* (Collins, 1983), p.34.

- (12) *ibid.*, p. 90.
- (13) *Marius the Epicurean* Vol. 2, pp. 188-9.
- (14) *Marius the Epicurean* Vol. 1, p. 144.
- (15) *The Picture of Dorian Gray*, p. 32.
- (16) *ibid.*, pp. 34-5.
- (17) *Marius the Epicurean* Vol. 1, p. 223.
- (18) *ibid.*, p. 25.
- (19) *ibid.*, p. 242.
- (20) *The Picture of Dorian Gray*, p. 166.
- (21) *Marius the Epicurean* Vol. 1, p. 13.
- (22) *The Picture of Dorian Gray*, p. 97.
- (23) *Marius the Epicurean* Vol. 1, p. 150.
- (24) *The Picture of Dorian Gray*, p. 29.
- (25) *Marius the Epicurean* Vol. 1, p. 151.
- (26) *The Picture of Dorian Gray*, p. 141.
- (27) *Marius the Epicurean* Vol. 1, pp. 151-2.
- (28) *Marius the Epicurean* Vol. 2, p. 25.
- (29) *Marius the Epicurean* Vol. 2, p. 21.
- (30) *The Picture of Dorian Gray*, p. 149.
- (31) ed. Karl Beckson, *Oscar Wilde: The Critical Heritage* (Routledge & Kegan Paul, 1970), p. 84.
- (32) *The Picture of Dorian Gray*, p. 32.
- (33) *Marius the Epicurean* Vol. 1, p. 124.
- (34) *Marius the Epicurean* Vol. 2, p. 23.
- (35) *ibid.*, p. 110.
- (36) *ibid.*, p. 114.
- (37) *Marius the Epicurean* Vol. 1, p. 22.
- (38) *ibid.*, p. 241.
- (39) *Marius the Epicurean* Vol. 2, p. 107.
- (40) *ibid.*, p. 20.
- (41) *The Picture of Dorian Gray*, p. 115.
- (42) *Marius the Epicurean* Vol. 1, p. 243.
- (43) Oscar Wilde, *De Profundis* (Collins, 1983), p. 922.